

## 関東・東山地域におけるソバ在来品種の分布調査と収集

手塚 隆久<sup>1)</sup>・原 貴洋<sup>1)</sup>・勝田(石) 眞澄<sup>2)</sup>

1) 九州農業試験場・作物開発部・資源作物研究室

2) 農業研究センター・作物開発部・資源作物育種研究室

## Field Survey for Buckwheat Landrace in Kanto and Tosan Region

Takahisa TETSUKA<sup>1)</sup>, Takahiro HARA<sup>1)</sup> and Masumi KATSUTA-SEKI<sup>2)</sup>

1) *Laboratory of New Industrial Crop, Department of Crop Improvement, Kyushu National Agricultural Experiment Station, Nishi-goushi, Kumamoto 861-1192, Japan*

2) *Laboratory of Resources Crop Breeding, Department of Crop Improvement, National Agriculture Research Center, Tsukuba, Ibaraki 305-8666, Japan*

### Summary

Buckwheat landrace cultivated in Kanto and Tosan region are considered as good breeding material for buckwheat breeding program in a warm region. However, we have few accession which are collected in these area.

Exploration and collection was conducted in Tochigi, Shizuoka and Aichi prefecture to collect local varieties. Nine accessions which were grown in different districts were collected. In addition, one barnyard millet and one foxtail millet were collected. Those are evaluating for diversity on growing characteristics and grain qualities.

**KEY WORDS:** buckwheat, landraces, collection, exploration, Tochigi prefecture, Shizuoka prefecture, Aichi prefecture

### 1. 探索の概要と経過

関東および東海地方で栽培されるソバ在来品種は、暖地向けソバの育種素材として重要である。しかし、現在遺伝資源として保存されているソバ系統は、東北や長野県などの高冷地で収集されたものが中心であり、暖地向け育種の素材として利用できるものが少ない。本調査では、温暖地向き育種素材を探索する目的で、これまで体系的なソバ在来品種の収集を行っていない地域のうち、栃木県、静岡県、愛知県において在来品種の栽培状況を調査し、種子を収集することとした。

探索調査は、暖地向けソバ品種の育成を担当する九州農業試験場資源作物研究室と農業研究セン

ター資源作物育種研究室が共同で行った。

## 2. 調査地域の概要と在来ソバ品種の栽培・利用状況

調査日程は、平成12年2月8日に栃木県今市市周辺、9日には静岡県と愛知県の県境地域で調査・収集を行った(Fig. 1)。調査地域におけるソバの栽培状況について聞き取り調査を行い、その地域で栽培されているソバ系統の農家保存種子を分譲していただいた(Table 1)。

### 栃木県今市市小百(こびゃく)

小百地区は今市市の中央部に位置し、鬼怒川の支流である小百川の中流に沿って水田が分布している。ソバは主に転作水田で栽培されており、調査を行った高畑集落では請負耕作によるソバの契約栽培も行われていた。

高畑集落の利沢とし氏は、25aの転換畑に、秋ソバ単作で栽培していた。8月上旬に播種して、11月10日頃刈り取る。サルの被害を避けるため、収穫物は刈り取り次第脱粒し天日で乾燥する。収穫量が多い年は、1俵2万円で親戚の地ソバ屋へ販売する事もあるが、ほとんどは自家用である。

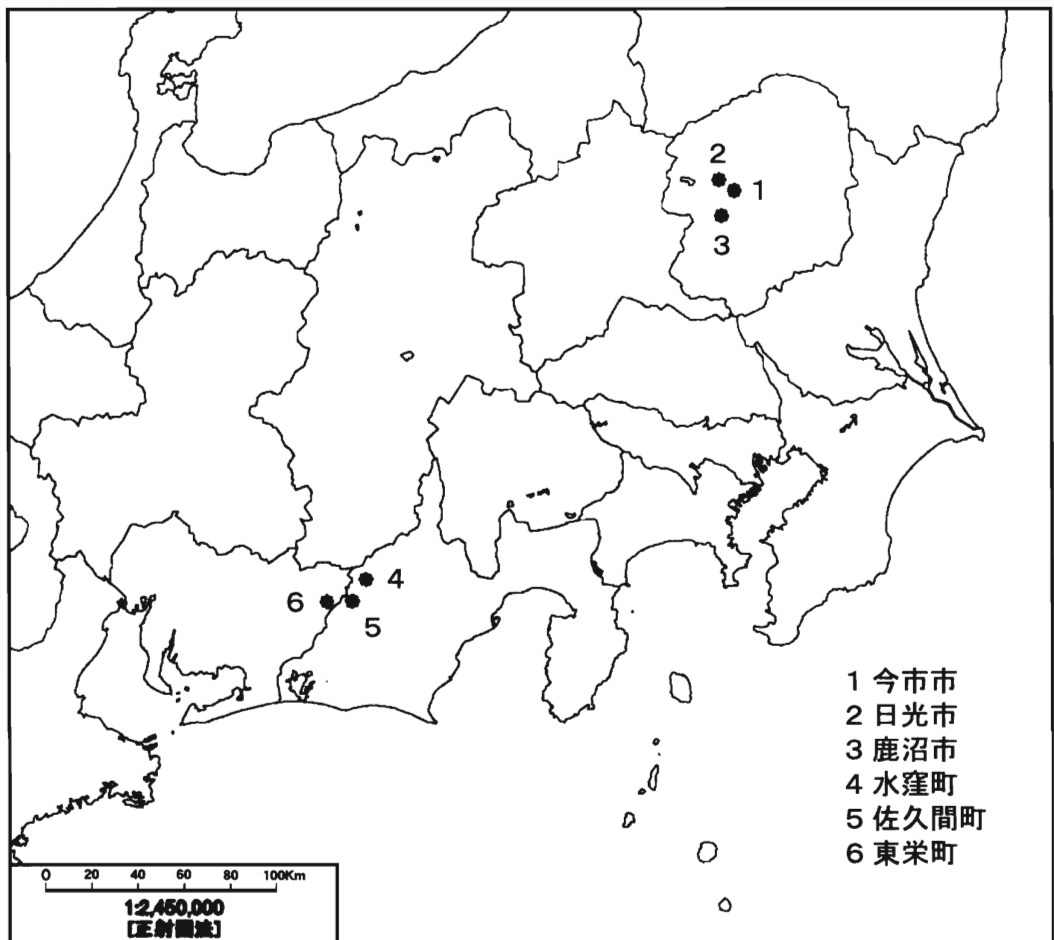


Fig. 1 Location of explored area. 調査地域

Table 1 List of collected samples  
 収集品リスト

作物名	呼称	農家名	収集地等
ソバ	今市在来	利沢とし	栃木県今市市小百（高畑）
ソバ	小来川在来	中村伝七	〃 日光市小来川（塩の原）
ソバ	草久在来	大貫栄一	〃 鹿沼市草久4（鹿の入）
ソバ	水窪在来1	石本静子	静岡県磐田郡水窪町地頭方
ソバ	水窪在来2	永井勝市	〃 〃 水窪町奥領家神原
ソバ	水窪在来3	守屋はな	〃 〃 水窪町地頭方（上村）
ソバ	佐久間在来1	亀久保保子	〃 〃 佐久間町佐久間
ソバ	佐久間在来2	〃	〃 〃 〃 〃
ソバ	東栄在来	尾林経夫	愛知県北設楽郡東栄町御園字坂陽 標高550m
ヒエ	水窪在来1	石本静子	静岡県磐田郡水窪町地頭方
アワ	水窪在来	石本静子	静岡県磐田郡水窪町地頭方 モチアワ

#### 栃木県日光市小来川(おころかわ)

今市市の南にある鶏鳴山(標高961m)の麓に位置する小来川地区は、黒川に沿った山間地域である。麻の栽培が行われなくなった時期に、アズキとともにソバも栽培されるようになった。現在では、一部の転作水田でもソバが栽培されている。

塩ノ原集落の中村伝七氏は、転作水田15aの秋ソバを作付けている。8月10日ごろ播種して、10月下旬に収穫する。1-2回の降霜で脱葉した後に、バインダーで刈り取った株を圃場に積み干し、棒で叩いて脱粒する。収穫物はほとんど自家用として消費するが、一部は協同組合などに出荷することもある。

小来川地区では、協同組合が山間の景観地で「山家」という食堂を経営し、地元の住民や観光客などを対象に、地ソバを中心としたメニューを提供している。組合長の福田栄子氏は、地元や県内の葛生町、粟野町などのソバ生産農家からソバを買いつけており、年間1500kg程度を購入している。ここでは、組合長が圃場で品質を確認し、山間地の畑で生産されたソバだけを利用するということがあった。山間地の畑で生産されたソバは、転作水田産の1.8倍の価格で取り引きされており、品質に対する圃場の影響が強く意識されていた。

#### 栃木県鹿沼市草久(くさきゅう)

鹿沼市西部の草久地区は、大芦川沿いでコンニャクが主に栽培されていた地域である。耕作者の高齢化などによってコンニャク栽培を行わなくなった圃場でソバを栽培していた。

鹿ノ入(かのいり)集落の大貫栄一氏は、8年ほど以前までコンニャクを栽培していた礫質の圃場で秋ソバを栽培している。8月7-10日頃に播種して、降霜1-2回後の11月中旬に収穫する。自家用

として消費する。

#### 静岡県磐田郡佐久間町

佐久間町は天竜川の上流に位置する町で、西は愛知県に接し、赤石山系が南北に連なる山岳地帯の一角にある。

佐久間町の民族文化伝承館は古い農家を移築した建造物で、民具や土雛を展示している。そして、60代、70代の農家の婦人たちが野田山びご会という組織を作り、民話の語り部としてまた手打ち蕎麦の作り手として伝承館で活躍している。

山びご会の人たちにソバ栽培についてうかがった。野田(のた)地域では古くからソバ栽培が行われている。ソバはお盆以降の8月下旬に播種し、10月中下旬に収穫する。収穫は手刈りで行われ、はざに架けて乾燥する。脱穀は手で行う。収穫したソバはほとんど製麺用に消費する。製麺は、まず殻を取り除いて製粉する。そば粉に1割程度の小麦粉を混ぜて手打ちにする。昔、蕎麦は祭りなどのお祝いの時に食べるごちそうであった。ソバ種子は亀久保保子さんにいただいた。

#### 静岡県磐田郡水窪町

水窪町は佐久間町よりさらに標高が高く、愛知県と長野県に接する。水窪町では昔から現在まで自家消費用にソバが栽培されている。

地頭方(じとうがた)の石本静子さんにソバについてうかがった。石本さんはソバや雑穀類を栽培するだけでなく、需要を拡大するためにその料理法についても研究している。ソバは8月下旬に播種し、10月中旬に収穫する。生育期間は50から60日だという。トウモロコシ跡に無肥料でソバを散播し、覆土はほとんどしない。収穫は手刈りし、はざにかけて干す。乾燥したら棒でたたいて脱穀する。用途はほとんど製麺用である。種子はソバだけでなく、ヒエとアワも分譲してもらった。

このほかに、石本さんを通じて奥領家神原の永井勝市さん、地頭方の守屋はなさんからソバ種子をいただいた。永井さんは水窪川上流の標高800m程度の高地で栽培している。

#### 愛知県北設楽郡東栄町

東栄町は林業中心の町である。御園の尾林経夫さんは祖母の代からソバを栽培している。ただし、35年くらい前に一時栽培を止めたかもしれないという。8月20日頃に散播して10月下旬から11月上旬に収穫する。

### 3. 所感

今回調査した地域では、村おこしの一環として地ソバを使い特産品として利用をすすめている事例が多かった。小規模な実需者と生産者の関係では、品質にたいするこだわりも非常に強い。しかし、現状では実需者から最も強く吟味される品質を意識した品種の選択は行われてはおらず、生産地や圃場によって実需者側からの選別が行われていた。

一方、多くの農家は在来品種を自家用中心に栽培していて、一部が余剰生産物として販売されて

いる程度である。特に栃木県の場合は秋ソバ単作で連年栽培を行っている農家が多く、収穫後の11月から8月上旬まで、圃場は裸地状態である。雑草管理のために除草剤を使用する農家もあって、集約的な圃場の利用は行われていない。このような中で、実需者は良質のソバを安定して確保するかという問題も抱えている。

転作水田や、畑作における基幹作物の変化によって、ソバの作付は増加傾向を見せている。現状で栽培されているのは、古くから地域で栽培されていた在来の系統が多く、変異の多様性も期待される。需要が大きい良品質ソバの栽培を積極的に拡大するためには、品種による品質の安定化が期待されている。今後も各地の在来品種をできるだけ多く収集して、品質における品種間差の程度についても明らかにする必要があると考える。